

1. これまでの家政学研究の抽象化された単純な概念が生命の再生産であり、従ってまたその対象とするところが、生命の再生産現象であるという前提にたって、生命の再生産のメカニズムを解明する。

2. これまでの歴史とその現時点における歴史の発達段階において、本質としての生命の再生産はその現象形態として具体化する場合、家族という集団を形成することによってその目的を実現する。前回の報告において、本質の概念が現象として展開される必然的な過程の中でいかに理論的に構成されるかを示したが、生命の再生産が一つの家族集団を単位として実現されているそのメカニズムを把握するために、理論的に構成された概念を論理的に展開する。こうした方法による論理の展開過程を、さらに大河内・籠山氏の労働力再生産論、山崎氏の生活力論にみられる問題点を指摘対比しながら結論に導く。

3. 人間が日々自己の生命を再生産し、世代をこえた他人の生命の再生産を行うための方法は、現段階では家族集団を構成することであった。そのためには家族構成員の生命力の具体的な表現である生活時間の総和が前提され、総和された生活時間を全構成員の再生産のために必要な要素のためにどう配分されるかが考慮されねばならない。労働力は、まさに必要とされる貨幣量を獲得するために、生命力のどれだけを労働力としてうらねばならないかという範疇において理解される。